



六花

12

2020

りっかはいくかい

傘もなし土佐は時雨の帯屋町
時雨傘もつて転ぬ頬を打ち
向傷また増えにけり秋の暮
凧を肴に真夜を過しけり
秋の暮額に血染タオルかな
薩摩いも煮うか焼うか揚やうか
木の葉にて天塞れてゐたる水
茶の花に時を忘れて屈みぬる
茶の花を有馬守に折とりぬ
コスモスに播州百鬼夜行かな

稲美 天満大池

池普請抱れし鯉の力ぬく
新米を八分搗してゐたりけり
寒けれど換気をせよとご老体
赤松の鼓遊か添水鳴る
新米の艶がこんな白いとは
秋の鯉覗ば急に暴れけり
色鳥の声降る水をにぎやかに
散込で水に浮名の紅葉かな
前を行く人の白息背にまはる

子の微熱◎ 笹村 政子

子の微熱つくつくぼうしつくぼうし
ゆるやかに穂の戻りくる萩の風
日当りて総身をさらす穴まどひ
包丁の音の手早く柚子きざむ
秋の田や各駅停車動きそむ
つもるかど四阿に降る木の実かな
暮れゆかばまだらに揺るる秋桜
熊の餌にどんぐり拾ふ少女かな
鐘楼の末広がりには昼の虫
色鳥や空をゆたかに鶴林寺

△子とは我が「」のことで最愛のご主人を亡くした嬢さんであろう。子は何時まで経っても子で幾ら気丈な娘でも母親の前では本音が甘えたいはずなのに我慢している。母はせめて親の前では甘えてよ、という思いがある。傷ついた娘を法師ゼミが鳴いて子守歌のようにあやす△彼岸を過ぎ冬眠に入らない蛇は日光を嫌うはずなのに日に曝さるのは苦痛であろうといわれている。蛇の立場にすれば、今のうちに充分日光を浴びてということか△日暮れのコスモスを詠んだのは珍しい。しかもその色がまだらに、というも独自の色彩感覚が働いている△色鳥というの渡鳥もしくは留鳥が秋に山間部から平野部に下りてくる美しい羽色をした小鳥のこと。掲句は目に見える小鳥よりも鳴き声に眼目を置いて詠んだ。歴史ある聖徳太子ゆかりの鶴林寺に相応しい秋の光景△最近の政子は平明で深く静かに詠む境涯に來ている。

夢風撰巻頭

星飛んで乱れをりけり藻の流れ 住田千代子

同時作
桃啜るいち日の難払ふかに
炎天や狛犬かたく口閉ぢて
盛り上げて海の青さのかき氷
遠慮なき客に風鈴騒ぎけり
払へども真赤に迫り来る西日
ふた晩を寝かせし桃を剥きにけり
星飛んで乱れをりけり藻の流れ
鳴らすこつ得て鬼灯の破れけり
水槽の水替へてゐる晩夏かな
朝顔の気ままに蔓を伸ばしやる

ほしとんでみだれをりけりものながれ すみだちよ

「星飛んで」とは流星で秋の季語。藻の花も終わりがけ澄んだ流れに藻が揺れる。全国どここの清流でもよいが、特に滋賀県の醒ヶ井(さめがい)の澄明な流れの梅花藻(バイカモ)が有名。そこには醒ヶ井餅(丁子屋)があって、芭蕉書簡に醒ヶ井餅の礼を認めている。掲句はその醒ヶ井の早い流れに揺れる藻をみて秋の夜空に飛ぶ星のせいで藻が乱れていると詠んだ。星が流れることとは関係ないが、それがきっかけで藻が乱れたと措辞したのは、力の付いてきた作者ならではの表現。その乱れる様子が彦星織姫のロマンに連想が迷走しそう。同時作も佳い。(一八)

志方 章子

朝 顔

お隣の朝顔楽しんでをりぬ
 蚊を打つて話の接ぎ穂戻しけり
 窓の秋楽しんでゐる病臥かな
 流星は神の使ひかと思ふ
 うとましくなりぬ朝顔咲きつけ
 こんなにも大きかりしか盆の月
 文月や文を出さざり文も来ず
 遠花火聞いてをりたる夢うつつ
 手花火を持つ指先のあちちち
 八分の一の西瓜を買ひにけり

▽朝顔を自らで育てた楽しみはないが、充分に朝顔の花を楽しんでいるよ、というちやつかりぶりも楽しいではないか△病臥しながらも窓から見える秋の景色を楽しんでいるというのが佳い。こういう楽しみ方を章子が持つてくれるのが一番である。この作品は佳い方へ力の働く言葉で、大切なことである△文月でありながら文を出さず貰わずで、こういうのを淡交というのであろう。羨ましいこと淡交とは「莊子」山木の「君子の交りは淡きこと水の若（ごと）し」から》あつざりした交わり。君子の交際をいう。そういう交際がいいのである△手花火の句はかなり挑戦的で章子らしい本音で面白い△西瓜の求め方も二人暮らしの楽しみ方を上手くこなしている。章子は買ひ物の句に面白さを詠む。

升田ヤス子

播州平野

鉄線忌風に泳げる蛇の衣
 黒蝶を放ちやらざり花臭木
 夕茜はやしてゐたる秋燕
 秋つばめ葦のねぐらに沈みけり
 この中洲捨てて燕よ帰るなかれ
 寧らけき播州平野星流る
 さるすべり二階の手摺たよりなく
 ほほづきの口を舌もて探りけり
 寺家町の色なき風に服を買ふ
 穴まどひ車輪かざらる線路あと

△鉄線忌とは「亡き妻の植糸し鉄線白ばかり」を詠んだ、ヤス子の元師匠松崎鉄之介の忌日である。先月は大野林火忌を詠み、あの世の人を恋う句を詠んでいるのがいささか寂しいが、まだまだ元気が気炎を吐いてほしい△秋の燕が帰り支度をするために一カ所に集まって賑やかに鳴き交わしている光景を夕茜を囀っていると観じた、しきりに鳴き交わして弾みをつけて南国へ飛び発つのである播州平野の句、寧けきの文字は、分解すれば家は家の屋根、「心」は人の心、「皿」は料理を盛り付ける器を意味し、家の中で食べ物があがる状態、つまり「安定して心が安らぐ」状態で星飛ぶ空を見ながら自らも今では播州平野にすっかりなじんでわが故郷のごとくここに骨をうずめるのだろうかと見上げている作者静かな心境が詠まれている。

昼寝覚め

飛ぶ蝗猫追ひかけて飛びつきぬ
 若者のバイクの列や曼珠沙華
 手作りのお萩のお昼秋彼岸
 蓼の花机にさして敬老日
 今日の日は気ままに過ごす敬老日
 少しづつ日短となり寺の鐘

大内 幸子

無花果へ人恐れずに鳥の声
 鳶の影大きく落とし涼新た
 玄関に鎌をかざしていぼむしり
 迷ひ込む鬼やんまとの一夜かな
 少しづつ日短となり寺の鐘

▽イチジクの実を狙って鳥たちがやってくる。空腹を満たすのに必死で人は怖い恐怖を越える空腹の行動である▽秋になると空気が澄んで鳶の影も地上に大きい。その驚きもさながら影を明確に置く空気の澄んだのを感じている▽部屋に迷い込んだオニヤンマを追出すこともできず、一夜を過ごしたのだ。芭蕉は遊女と一家に寝て、幸子は夫のような鬼やんまと一夜を明かしたのである△鬼やんまは天井を飛び続け埃を落したり大変だったろうと思う▽人は生きていく以上誰かと会い自分のわがままには暮らせない。が、今日は敬老日だから気ままに過ごそうと決めた。それは健康の秘訣である。ストレスはよくない▽猫族は動くものを追いかける本能があり、二三日は獲物を食べなくても生きていく。だからバツヤや蝗を飛びついて食べるが、ただ遊ぶだけの行動もする。ただしその遊びは常に捕食の練習でもある。

秋団扇

花道をうなだれかへる角力かな
 コスモスの風を受けとめはじめけり
 たわわなる柿の一つが小窓より
 あげぼのの水より明くる野萩かな
 聞きなれぬ鳥のこゑして秋暑し
 縮跳んで水平線のゆるびけり
 空蝉のすがりたる墓洗ひけり
 稲の花田毎に畦の刈られけり
 蓑虫の仕立て上げたたる一張羅

藤生不二男

▽団扇が秋の床几に置かれているとだけ言った。夏場は夕涼みに使われたのであろう、が、今はその用もなくなった。芭蕉は俳句を夏炬冬扇のごとしといった。まさに床几に忘れられたようにあるウチワの哀れも見える。風情の漂う光景だが、薄日の秋日がタメ押し的に思えて少しくどいのが惜しい▽墓を洗うときには空蝉もゴミや汚れ同然の扱いであつて洗い落とされる。「すがりたる」も空蝉の常套表現。不二男くらいになればもつと省略できる▽ミノムシは表面は荒く蓑を着た状態だが、蓑虫にとっては仕立て上げた一張羅だという技巧の句。辻田克己の句に「みのむしの外粗衣内絹衣」という句もある△たわわに実った柿の実を小窓に見つけズームイン。柿の一つに焦点を当てると意外な姿が見える▽野萩の句、水から夜明けがやってくるという表現は辻邦生「明月記」にすでにある。

月下美人

朝顔の気ままに蔓を伸ばしやる
 水槽の水替へてゐる晩夏かな
 鳴らすこつ得て鬼灯の破れけり
 星飛んで乱れをりけり藻の流れ
 ふた晩を寝かせし桃を剥きにけり
 払へども真赤に迫り来る西日

▼古代、桃には魔を祓う力があると信じられていた。それを援用して一日の汚れや難を祓うために桃を啜ったというのが佳い△犬は口からしか体熱を放出できない。のに、狛犬は難く口を閉じていると見た洞察の面白さがある▼かき水を津波のように盛り上げたという見方が大きめで、津波より大きな口をあけている人を想像させるのが独創的▼真赤な西日を払うという仕草非現実で自虐的な愉快さも▼藻が流れに乱れているのを流れが乱されたと言った意外さが夢風撰▼鬼灯の句、鳴らすコツを知ったばかりに酷使して破ってしまった悔い。晩夏をよむには夏場に疲れ汚れた金魚の水を掬えたのが佳い。▼朝顔の蔓を自由に伸ばしてやるというのが、おおらかでいい。

住田千代子

桃啜るいち日の難払ふかに
 炎天や狛犬かたく口閉ぢて
 盛り上げて海の青さのかき氷
 遠慮なき客に風鈴騒ぎけり
 払へども真赤に迫り来る西日

鹿の子

屋台庫の今年は開かず鶏頭花
 汐くさき橋の袂や鯉の影
 虫の夜の寝ねがてに來し福寿かな
 やちまたに迷ひつつ來し秋燈
 新涼や紙面に友の特選歌
 秀野忌のかつと差したる西日かな

▼父が生きておられたらと感慨にふけりながら盆を迎えた。亡き人の歳を数えるのも盆の時期ならではのこと。すごい人物だったのだろう▼池に吹く風が強く誰が鎮めたかを言えば読者にも伝わりやすい。が、蓮の動きに煽られた自らの気持を鎮めたのかも▼秀野とは山本健吉夫人の石橋秀野「蟬時雨子は担送軍に追ひつけず」を遺した▼元同僚の教師から吟醸酒「福寿」を送ってきた。丁度夏酒にもつてこいであるよ、とお礼挨拶した句▼「やちまた」について鶴見俊輔は「文法を主人公とするこの稀有の小説」と解説。作者、行の生きざまに通うものがあつたのである。行の小説「旅の序章」にも影響があるようにも思える▼橋のたもとに立つと常より強く潮の匂いがした。ボラに匂いを刺激されるのは、ここ五十一年の私の記憶では垂水の福田川河口である。場所は全国のどこでもいいが▼屋台庫はコロナ禍で今年の出番なしで里祭も静かなもので、残念であつたに違いない。

善野 行

父在さばけふ八十九盆の入り
 七曲坂のはじめや花木槿
 蓮の花めくれ合ふ葉を鎮めけり
 今朝秋の空には千切れやすき雲

谷口 一献

野分来る句会定刻始まりぬ
いざこざは鬼灯吹いた夜のこと
片頬の麻酔の匂ひ朝の冷え
静止する境内秋の蚊の羽音
団栗や飛鳥は遙か彼方かな
菩提子を裏返しました戻す鳥
秋色のあいたた観音腰捻り
一瞬に消ゆる声聞く寺の秋
難聴のこと忘れたる蟲集く
熱爛は歯に沁み喉沁み胃に沁む

▽定刻に句会が始まるのは当たり前だが、この日は事情が違う。野分が迫っているのに何事もないうに句会を開く人たち。どうかして、知らんけどと一献は言う
▽鬼灯を吹いた夜にいざこざが起きた。ちよつとした鬼灯の種の抜き方とかほんの些細な家庭騒動から戦争に発展した例もあるので気を付けよう。一献の句はそういう平和の中に潜む恐怖を平気で軽く言うのが魅力△菩提子といえば秋の季語。その種を鳥が返して食べるのかと思つたら、また返した。人間の予想を裏切る行為を一献は面白がる。これぞ風雅。夢風撰候補▽秋色のあいたた観音の腰にどうしても男は眼が行く。加古川にある鶴林寺にいろいろないきさつを持つ仏さまが沢山。片頬の麻酔のことをいうのを忘れた。おそらく虫歯の治療の句であろう。おおよそ休みの日に歯痛が起こる。△難聴気味の耳に虫の声が多くて難聴耳鳴りが分からない。

松虫

松虫を聞きもらさじと待ちにけり
病院へ影紡ぎ行く猛暑かな
真黒なる向日葵に葉のまだ青し
野分あと川に長蛇の木の葉塵
コンビニのすべての氷菓試したき
炎天の俄に変わり豪雨かな

▽万年青は実に丁寧に写生句に励む。睡蓮の葉が風に裏返つたとき褐色であると平凡に詠んだ。陳腐は採らないが平凡は採ると虚子は言った▽秋の鯉は冬に備えて食欲旺盛。人影を見ると餌を期待して人懐こそうに寄つてくるのが可愛いのである▽松虫を聞いたことはあるが、知らないのがある。この機会にぜひ聞いてみようと思き耳を立てる。その好奇心が佳い。「チンチロリンとかチッチロリ」と鳴く。がそうは聞こえないという人も多い▽野分あと川には木の葉が吹きちぎれて流れる。が塵とまでは言わなくてよい△炎天の俄かに変わるというのは昔なら普通の夕立。今は温暖化でおそろしい現象になった。

永田万年青

田尻 勝子

冬星座窯変天目茶碗かな
 オリーブ油風邪引きの喉通りけり
 苔玉に楓の羽根のとどまりぬ
 小春日や共に口開く離乳食
 立田姫の御手の触れしか初紅葉
 名月を団地の空に探しをり
 団栗をこよなく愛す男かな
 蝉の音の変わり落ち蝉あちこちに
 ラスコアの壁画書いたと年賀客
 祈りても祈りても春の沈黙

▽窯変天目の句は以前にもみたよ
 うな気がする▽風邪ひきにはオ
 リーブ湯がいいのかもれない、
 が口がすべって余計なことを言
 わぬようご注意▽苔玉の句は写生で
 とても佳い△小春日の句、なか
 か面白い。夢風撰候補▽立田姫の
 句は知識のもてあそびで古い△団
 栗の句はまずまず。▽蝉の声が
 変わったと思つたら夏の終わり
 であつた。時の流れは残酷である
 と詠んだ▽ラスコアの壁画を描
 いたというから35年の男が年賀に
 来たのか勝子がその時代にさかの
 ぼつていつたのか。夢のような話
 で面白い。初夢なのか？▽春の沈
 黙とは面白いができれば季節を考
 えて投句するのがよい。沈黙は
 あるのが良いが秋の沈黙では
 句が広がらない。春の沈黙は彼女
 自身のことであろう。第三者に伝
 わるように詠めばいい。

誠 出口

知らぬ間に暗くなりゆく秋の空
 秋の蝶追ひ風受けてすれちがふ
 秋の昼ドアの閉開ゆつくりと
 秋の昼国勢調査の人が来る
 秋の昼ゆつくり静かに行動す
 長男の作りしケーキ秋の宵
 秋の宵声の大きさ注意さる
 歩く我追ひ抜きていく秋茜
 我を見てあとずさりする秋の猫
 チョコレート敬老の日のプレゼント

▽秋の夕暮れは気が付けば暮れて
 いることが多い。何か考え事をして
 いて気が付いたのであろう▽秋
 の蝶が追ひ風を受けてというのが
 独創的で佳い。久しぶりに誠俳句
 の神髓をみせてくれた夢風撰候補
 ▽今年に国勢調査がある。秋の静
 かな昼の出来事である▽長男が
 ケーキを作ってくれた。知らず知
 らずに子供は成長する。ケーキの
 味はきつと喉に詰まるほど美味し
 かったにちがいない△秋の夕方声
 が大きいと注意された。今は大声
 はコロナウイルスをまき散らすと
 恐れられているのだ△猫が顔を見
 てあとずさりしたのだ、警戒され
 ているのはたとえ猫でも寂しいも
 のである△バレンタインではない
 がチョコレート敬老の日にもら
 うのもうれしいうらさみしいや
 ら。

平居 零子

一句得て悔いなく帰る炎天下
 少年の晒の禪井戸浚
 参るたび思慕の深まる秋彼岸
 初秋の風吹峠父子越ゆる
 さ緑の萼押し開く曼珠沙華
 咲き満ちて参道狭し萩の寺
 園庭のコスモス鉄棒より高し
 星空を仰ぐ子の眼や星月夜
 来し方も行く末も消え秋の虹
 行き止まる道にしばらく虫を聞く

▽このひと古墳周辺を彷徨して句をひねっているのだ。なかなかできないが、一句でもできたからまあいいか、と帰る。それでいい。そんなに沢山出来てもいけない。一生一句でよいのだ。△井戸浚は昭和の頃にはまだ残っていて、身軽な子供をフンドシ一つで中へおろし、ごみを取らせていた。ごみを取り切ると新しい水が湧いてくる。少年はそのころ唇を青くして寒い寒いの連発である。懐かしい光景▽風吹峠は紀伊国と和泉国を結ぶ根来街道の途中にあるという。その地名が活かされている△鉄棒より高いコスモスには親子供が迷路に嵌まり込む。すごいなあ▽星空を仰ぐ子供の眼には星が満杯に映っている△秋の美しい虹によって何もかも一瞬消えたというのが佳い。夢風撰候補▽行き止まりでしばらく虫の音に聞き入っている。何か人生観がみえる。

廣畑 育子

緑蔭のひとつつベンチに端と端
 仏桑花静かに過ぐる通学児
 今朝の秋目映きほどの白き雲
 朝の歩の無花果畑匂ひ来る
 鶏頭の衰へのなき紅の色
 鶏頭の花に捻れる迷路あり
 鈴虫を覗けば愛想鳴きをせり
 皮のまま食す葡萄を手土産に
 小さき花付けて大きな胡瓜かな
 朝の蜘蛛吉兆なりと目で追へり

▽緑蔭涼しいベンチに端と端に離れて二人が座っているのも不自然だ、と見えたのか。いやいやコロナ禍でウィルスが移らないようにしているのだろうという。立秋の朝空にはすでに眩いばかりの雲に眼が痛いほどだよというのである。立秋らしい句▽イチジクの畑が匂う。実が成るころはもつと激しくイチジクの匂いがしている△鶏頭の花に捻じれる迷路というのが佳い。夢風撰候補▽鈴虫が愛想鳴きをするというのも面白い夢風撰候補▽葡萄も最近皮のまま食べられる品種が出てきた▽胡瓜はもともと大きくなって黄色くなったものを食べた。その胡瓜に小さな花がついて残っている光景▽朝の蜘蛛は吉兆と言われて殺したりしてはいけないと昔から。我が家では一日中机に棲んでいて、可愛いから名前をつけて呼んでいる。結構可愛いものだよ。

浜田久美子

湯浴みして待てば雲間に盆の月
 古時計捻子巻く父や野分あと
 さやさやと影に音ある秋簾
 亡き姉に会ひたくなるよ三日の月
 水際にやさしき萩の鶴林寺
 見事なる石に筆跡金鈴子
 将棋指す音の響けり萩の寺
 秋日和古刹の松の堂々と
 草の葉の揺れて飛蝗や足元に
 団栗の元の袴にもどしけり

▽湯あみして待つというのが艶治
 でいい。名月の頃はまだ昼間は暑
 い▽野分の頃になると時計の捻子
 を巻いていた父上を思い出す作者
 ▽秋の簾に風が吹いている光景が
 佳い夢風撰候補▽三日月を見る
 と亡くなった姉を思い出し会いた
 くなるのだ姉上と眺めた三日月▽鶴
 林寺で門前の濠に咲く萩の花を愛
 でている△金鈴子とは袴の実(あ
 うち)センダンの実香木ではない
 が実が黄色で美しい▽秋日和の
 句、鶴林寺あたりは昔の尾上の浜
 で松が沢山ある名所旧跡の歌枕▽
 草から飛び立ったバツタが風に煽
 られて足許にとんできた驚きの句
 ▽団栗が落ちた時に袴が外れたの
 だろう。拾い上げてその袴を元に
 戻してはめたのだ。みっともない
 と言いたがらもやさしい気配りの
 句。

江見 巖

稲刈機ふえて農小屋狭くなり
 溝蕎麦の低き顔なり平家村
 雁渡し天窓からの煙かな
 どびろくを田舎の味として回す
 今年酒赤子の気分にて泊まる
 幼子に寝かされてゐる夜長かな
 マスクして検温済や菊人形
 カンカンと尿石砕く地下の秋
 雨女ばかり集まる敬老日
 無花果の当たり年なるジャムを煮る

▽溝蕎麦の花が咲く平家村美しく
 通うが「の」とかまく切るよりも
 方法があるように思える▽カリの
 渡つて来る九、十月ごろに吹く北
 風を雁渡しという天窓から出る煙
 も風に流される佳い時季である△
 どびろくとは田舎でいうどぶろく
 のこと。その回し呑みか何とも人
 の輪をつなぐのである△今年酒を
 飲んで懐かしいころに戻って泊る
 のだろう。か△菊人形の展示会に
 もコロナの影響が大きい。▽尿石
 を砕くとはその知
 識がないから解からない▽雨女と
 は出かけると雨が降る女性のこと
 をいうのだろう。百科事典には妖
 怪もいるらしい。「誰が雨女じゃ
 い」と叱られそうだから活字には
 しないほうがよいかも▽今年はい
 チジクが当り年のおうだ。余った
 らジャムにして少しくエン酸を多
 めにして保存するといいい。

浜田久美子

列なせる稲干し棒や平泉
 高館に義経偲ぶ昼の虫
 藻塩焼く自称百歳秋暑し
 水を替へ秋の金魚の活々と
 色鳥の庭に漁りてをりにけり
 狭庭には秋茄子の生る我が家かな
 鬼灯を友の馴染みの店にかな
 秋風やあいたた観音見にくれば
 麦藁で吹く鬼灯の紅風船
 床の間に鬼灯ひとつ灯しけり
 土嗅いで松茸さがす父の顔

▼床の間に生けた鬼灯の点景が見事に映える▼鬼灯の真赤な実をストローの上に置き吹くと回転して落ちない。南天などもそのようにして遊ぶ▼秋風の吹く日、鶴林寺にある「あいたた観音」を詠んだ。実に珍しいいわれの仏像が多い寺▼狭庭というのは、お孫さんを喜ばそうと延川家の庭を開墾して一部畑にした土に成った茄子▼色鳥が庭にやってきて餌をあさる姿が愛らしいという句▼金魚の水を替えてやると夏場の汚れが取れて金魚も生き生きとしてきた▼藻塩を焼いている老人が儼は百歳じやと言ったが、自称百歳というのを真に受けず皆で軽くない。▼高館は中尊寺の東方にある丘陵で源の義経にゆかりが深い。往時を偲んでいると鳴く昼の虫が一層感銘が深いのである。平泉では今も稲架果が並んでさすがに道の奥だなあとという句。

延川五十昭

秋浜や朱の欄干の五大堂
 早稲の香や北上川の水蒼し
 高館や義経堂のこぼれ萩
 尿前の関のしば栗拾ひけり
 秋蝶や冬は越せぬか出羽の関
 峠茶屋いぶりがつこに茸飯
 封人の家に商ふ山葡萄
 鬼灯や芭蕉泊りし旅籠跡
 尿前の薄むらさきのあけびの実
 土嗅いで松茸さがす父の顔

▼東北から帰ってきてもう一度現地を確かめてみたいと再び笠子さんと東北へ行ったという。そのエネルギーには感心する。いや奥さん孝行である▼五大堂の句は朱色の欄干がことに印象深かったのである▼早稲の香は芭蕉「有磯海」にならった句。北上川の秋の青い水△高館も義経への挨拶句。尿前では馬ならぬしば栗に興じた。冬の蝶は義経に因んだ胡蝶を示唆▼いぶりがつことはお新香の燻製▼封人とは国境を守る役人。「封人の家を見かけて舎（やどり）を求む」と芭蕉。芭蕉の泊った宿に咲いていた鬼灯。尿前の関所あとに見た通草の実の紫色に眼を向けた。これらの句を見ていると旅をしているように思えるようにさらりと挨拶している句である。次回には土地の名称を入れないで詠めるようになれば一人前の俳人。